

『楞嚴經』卷六 訳注 (三)

教学研究委員会編

(小川太龍・野口善敬・廣田宗玄・堀 祥岳・本多道隆・丸毛俊宏〔五十音順〕)

〔五〕

爾時世尊、於師子座⁽¹⁾、從其五體、同放寶光⁽²⁾、遠灌十方微塵如來及法王子⁽³⁾諸菩薩頂。彼諸如來、亦於五體、同放寶光。從微塵方、來灌佛頂、并灌會中諸大菩薩及阿羅漢⁽⁴⁾。林木池沼、皆演法音⁽⁵⁾、交光相羅、如寶絲網。是諸大衆、得未曾有⁽⁶⁾、一切普獲金剛三昧⁽⁷⁾。即時天雨百寶蓮華⁽⁸⁾、青黃赤白、間錯粉糝、十方虛空、成七寶色⁽⁹⁾。此娑婆界大地山河、俱時不現。唯見十方微塵國土、合成一界⁽¹⁰⁾、梵唄詠歌、自然敷奏⁽¹¹⁾。

於是如來、告文殊師利法王子、「汝今觀此二十五無學諸大菩薩及阿羅漢、各說最初成道方便。皆言修習眞實圓通。彼等修行、實無優劣、前後差別⁽¹²⁾。我今欲令阿難開悟。二十五行、誰當其根。兼我滅後、此界衆生、入菩薩乘、求無上道、何方便門、得易成就⁽¹⁴⁾。」

文殊師利法王子、奉佛慈旨、即從座起、頂禮佛足、承佛威神、説偈對佛⁽¹⁵⁾。

【校記】(一) 敷 〓 大正藏は「敷」に作る。

*

爾の時、世尊、師子座に於いて其の五體従り同に寶光を放ち、遠く十方微塵の如來及び法王子・諸もろの菩薩の頂に灌ぐ。彼の諸もろの如來も亦た、五體に於いて同に寶光を放ち、微塵の方従り、來りて佛頂に灌ぎ、並びに會中の諸もろの大菩薩及び阿羅漢に灌ぐ。林木池沼、皆な法音を演べ、光を交えて相い羅なること、寶絲網の如し。是の諸もろの大衆、未曾有なることを得て、一切普く金剛三昧を獲たり。即時に天、百寶蓮華を雨らし、青黄赤白、間錯粉糝して、十方の虚空、七寶の色と成る。此の娑婆界の大地山河、俱時に現せず、唯だ十方微塵の國土の、合して一界と成り、梵唄詠歌の自然に敷奏するを見るのみ。

是に於いて如來、文殊師利法王子に告ぐらく、「汝、今ま此の二十五の無學の諸もろの大菩薩及び阿羅漢、各おの最初成道の方便を説くを觀よ。皆な眞實の圓通を修習すと言えり。彼等の修行は實に優劣無けれども前後の差別あり。我れ今、阿難をして開悟せしめんと欲す。二十五の行、誰か其の根に當たれる。兼ねて我が滅後に此の界の衆生、菩薩乘に入りて無上道を求めんに、何の方便の門か成就し易きことを得ん」と。

文殊師利法王子、佛の慈旨を奉じ、即ち座従り起ちて、佛足を頂禮し、佛の威神を承け、偈を説きて佛に對う。

*

その時、世尊は、師子座私が坐られる座席において、五体全身から一斉に寶光を放ち、「その光は」遠く十方あらゆるところの微塵数えきれないほどの如來や法王子、諸々の菩薩の頭頂に降りそそいだ。かの諸々の如來がたもまた、五体全身から一斉に寶光を放ち、「その光は」微塵数えきれないほどの方向から飛んできて、仏の頭頂に降りそそぎ、同時にその場に集う諸々の偉大なる菩薩たちや阿羅漢たちに降りそそいだ。林の樹木や、池や沼も、みな法音を宣べ、「仏たちの放つ」光が交差

して整然と連なるさまは、宝（の）糸（で編まれた）網のごとくであった。「その場に居合わせた」諸々の大衆は、この奇跡に遭遇して、一人も余すことなく金剛三昧に到達することができた。すぐさま天はさまざまな宝玉でできた蓮華の花を降らせ、青・黄・赤・白（の花びら）が交差し入り混じって、十方空中が、七宝の色となった。この現実世界の大地と山河は、同時に立ち消えてしまい、ただ、十方の微塵の（諸仏の）国土が合体して一界となり、「浄土のように、美しい」梵唄や詠歌がひとりでに流れるのを見るだけであった。

そこで如来は、文殊師利法王子に告げられた、

「お前は、今この二十五人の無学の諸々の偉大なる菩薩たちや阿羅漢たちが、各々はじめてさとりを開いた〔時に用いた〕方便を説くのを観てみなさい。〔それぞれ〕みな真実の円〔満融〕通〔なる無碍のはたらき〕を修めていると言っているように、彼らの修行にはまったく優劣が無いけれども、〔悟りに至るまでの時間に〕前後の差別がある。私は今ま阿難に悟りを開かせたいと思っている。二十五人の修行のうち、誰（の修行法）が〔さとりにへの〕根源〔となる修行法〕に該当するだろうか。同時に、私が入滅した後に、この世界の衆生が、菩薩の道に入って究極の悟りの境地を求めようとするならば、〔二十五のうち〕どの方便の門〔に入るの〕が〔修行が〕成就しやすいであろうか」と。

文殊師利法王子は、仏の慈〔悲深い〕旨を奉じて、すぐさま座から起ちあがって、仏の足下を礼拝し、仏の威神を承け、偈を述べて仏〔の命〕に応えた。

*

（一）師子座 Ⅱ 「仏がすわる所。仏の座席」〔中村〕の事。また「獅子が百獣の王であるように、釈尊は法界の王者であるから、その高座には獅子が侍立して威嚴をそえていたという」〔荒木〕の事。『大智度論』に、「こ

れを『師子』と名付けるものの、実際には『師子』ではない。仏は人中の『師子』なので、仏の居所のうち座るところが床であれ地面であれ、みな『師子座』と名付ける。例えば、現在、国王が座るところもまた『師子座』と名づけているようなものだ（是れ号して『師子』と名づくるも、実は『師子』に非ざるなり。仏、人中の『師子』為れば、仏、所坐の処、若しくは床、若しくは地、皆な『師子座』と名づく。譬えば、今者国王の坐する処も、亦た『師子座』と名づくるが如し／是号名『師子』、非実『師子』也。仏為人中『師子』、仏所坐処若床若地、皆名『師子座』。譬如今者国王坐処、亦名『師子座』）（卷七・T35111a）とある。

(2) 従其五體同放寶光 〓 「五体」は「全身」（中村 p.371）のこと。『義疏注経』に「耳根円通、五根総摂」（卷六・T39907b）とあり、「五体」は「五根」の意とする。『楞嚴経義疏釈要鈔』は、「五体放光」とは、ほかの五根（眼・鼻・舌・身・意）が一時に「煩惱による繫縛から」解き放たれるさまを表す（『五体放光』とは、余の五根も一時に解脱することを表す／五体放光者、表余五根一時解脱）（卷五・XII.149c）とする。

(3) 法王子 〓 「法王子」は菩薩のこと。（三）注（31）参照。また、「仏を法王と呼ぶが、菩薩はその後継者だから法王子という」（荒木訳・p.135）とある。

(4) 會中諸大菩薩及阿羅漢 〓 『義疏注経』は、「大菩薩阿羅漢とは、即ち前の二十五聖、円通を説く人なり（大菩薩阿羅漢者、即前二十五聖説円通人）」（卷六・T39907b）とし、ここに言う菩薩は卷五で円通を説いた諸菩薩を指すとしている。「阿羅漢」は、「究極の聖者。さとりおわった人。修行の最高位に達した人」（中村 p.11）、また「梵語アルハンの音写。応供・殺賊・不生等と訳される。応供とは、供養を受けるに値する者の義。殺賊とは、煩惱の賊を殺害するの義。不生とは、生死を超越するの義。一般に小乗仏教の最高位をきわめたものを総称する」（荒木訳・p.8）とある。『大智度論』には、次の様にある。

「阿羅」は「賊」を表し、「漢」は「破る」ことを表す。一切の煩惱をなくし打ち砕くのを「阿羅漢」と名

づける。また次に、阿羅漢は一切の煩惱がなくなっている。だから、きつと一切の世間の諸もろの神々や人々の供養を受けられる。また次に、「阿」は「不」を表し、「羅漢」は「生」を表す。「阿羅漢となった」後の世に、完全に「不生（生まれてくることがない）」であることを「阿羅漢」と名づけるのだ（「阿羅」は「賊」に名づけ、「漢」は「破」に名づく。一切の煩惱を賊い破る、是れを「阿羅漢」と名づく。復た次に阿羅漢は一切の漏尽く、故に応に一切世間諸天人の供養を得べし。復た次に「阿」は「不」に名づけ、「羅漢」は「生」に名づく。後世の中、更に生ぜず、是れを「阿羅漢」と名づく／阿羅名賊。漢名破。一切煩惱賊破。是名阿羅漢。復た阿羅漢一切漏尽、故心得一切世間諸天人供養。復た阿名不。羅漢名生。後世中更不生。是名阿羅漢）」（卷三・T2580b）とある。

(5) 林木池沼、皆演法音 〔法音〕は説法のこと（『中村』p1290）。『義疏注経』に「諸仏、諸菩薩は」既に円通を号して、みな共に「仏法を」のべている。「仏」智は万物に行きわたっており、「林木や池沼も」どうして「仏」法をのべていないことがあるのか。網のように「智慧の」光を交差させながら、大教を円満に敷いているのである（既に円通を号し、彼我共に暢ぶ。智、万物に周し、何れの法をか宣べざらんや。光を交うること網の如くにして、大教を円張するなり／既号円通、彼我同暢。智周万物、何法不宣。交光如網、円張大教也）」（卷六・T3907a）とある。

(6) 得未曾有 〔未曾有〕は「仏典においては、これまでになかったこと、非常に珍しいこと、世にも不思議なこと、奇跡」（『中村』p1290）のこと。「得未曾有」の形は、『法華経』卷七「妙莊嚴王本事品第二十七」（T960a）など、諸經典類に頻出している。

(7) 是諸大衆…一切普獲金剛三昧 〔義疏注経〕は、「耳聞の円観（によって）、頭上に智慧の光がそそがれ、観音の三昧を、一時に共に獲得したのである。これは、とりもなおさず二十四人の尊者が共に観音の〔耳聞の〕一門に会したのであり、みな金剛三昧と名づけることができるのである（耳聞円観、頂は智光に触れ、観音の三昧、一時に同じく獲たり。此れ則ち二十四聖、同じく観音の一門に会すれば、皆な名づけて金剛三昧と為すを得たり／耳聞円観。頂触

智光。観音三昧一時同獲。此則二十四聖同会観音一門、皆得名為金剛三昧也」(卷六・T39.907b)とする。

(8) 百寶蓮華はつぼうれんげ さまざまな宝玉で出来た蓮華。ここでは散華に用いられるような蓮の花びらのことであろう。「釈要鈔」巻五に、「百宝〔蓮〕華」とは、万行の因華、本有の法身を莊嚴し、方に妙果を彰かにするなり(百宝華者、万行因華、莊嚴本有法身、方彰妙果也)」(Z1.645c)とある。

(9) 即時天雨：成七寶色 〔七宝〕は七種類の寶石。經論により内容が異なるが、例えば『法華經』卷三「授記品」では、「金・銀・瑠璃・車璩・馬瑙・真珠・玫瑰」(T9.21c)となつている。『義疏注經』は、「法としての身体は飾り気がないので、諸天・龍神から軽んじられている。いままさにはつきり目に見えるようになり、空中が宝で嚴かぎられたかのように、万行が集まつてくる。ゆえに『華間錯』とある(法身の体は素にして、天龍の忽劣する所なり。今將に顯現せんとし、空の宝嚴の如くにして万行集成す。故に華、間錯す/法身体素、天龍之所忽劣。今將顯現、如空宝嚴、万行集成。故華間錯)」(卷十六・T39.907c)とする。

(10) 此娑婆界：合成一界 〔義疏注經〕は、「六根と六塵が消え失せて〔本来の姿が〕恢復し、法界が円満に成就する。だから山河が立ち消えてしまい、「諸仏の世界が」合体して一つになる(根塵銷復し、法界円成す。故に山河現れず、合して一界と成るなり。/根塵鎮復法界円成。故山河不現合成一界也)」(卷六・T39.907c)とある。

(11) 梵唄詠歌、自然敷奏 〔楞嚴經箋〕巻六に「妙なる音、同ひとに奏す(妙音同奏)」(S89.81b)とあり、『要解』は、「梵唄詠歌、自然に敷奏す」というのは、法界(の衆生)を永遠に諸々の苦しみから解き放ち、常に妙なる安樂を得させることができる〔と〕いうことである(梵唄詠歌自然敷奏者、能使法界永離衆生苦、常得妙樂也)」(卷一・Z17.400b)とある。「梵唄」は「インドの詠法による歌唱」(『中村』p.1272)の1と。

(12) 無學むがく 有學うがく に対する語。すべての煩惱を断じ尽くして、阿羅漢果を得たものをいう。もはやこれ以上、学ぶべきものがないから、この名がある。(荒木訳・p.6)「有学」は(二)注(7)(8)(9)参照。

(13) 彼等修行：前後差別 、『義疏注經』に、「修行の要点は、実際に入るのを区切りとする。今みな証^註を獲得しているから、優劣がないのだ。しかし、『耳根による修行は』一日が一劫に相当する』(『楞嚴經』卷四)とされている。だから、「悟りに到達する時間に」前後の違いが生じるのだ。あるいは「修行者が」各々体得したところについていうならば、「到達に要する時間的な」前後(の差による)違いは無い(修行の要は実に入るを期と為す。今ま皆な証を獲得したり。故に優劣無し。然れども「日劫相倍する」(『楞嚴經』卷四・T01023a)有り。故に前後の差別を成す。或いは彼の各各得る所に就く可くんば、亦た前後の差別無きのみ／修行之要、入実為期。今皆獲証。故無優劣。然有日劫相倍。故成前後差別。或可就彼各各得所。亦無前後之差別耳」(卷六・T03390c)とあり、『解蒙鈔』の当該個所の割り注に、「此れ但だ至る所に約すれば、円通無二なることを明らかにす。所入の門には、遅速無きにはあらず。優劣無きも前後有るなり(此明但約所至、円通無二。所入之門、不無遲速。無優劣而有前後也)」(221-224d)とある。

(14) 二十五行：得易成就 、『二十五行については、廣田宗玄「解説」(二)に次の様にある通りである。「『楞嚴經』では、二十五聖(橋陳那・優波尼沙陀・香嚴童子・葉王葉上・跋陀婆羅・摩訶迦葉・阿那律陀・周利槃特迦・驢梵鉢提・畢陵伽婆蹉・須菩提・舍利弗・普賢菩薩・孫陀羅難陀・富樓那彌多羅尼子・優波離・大目犍連・烏芻瑟摩・持地菩薩・月光童子・瑠璃光法王子・虚空藏菩薩・弥勒菩薩・大勢至法王子・觀世音菩薩)と呼ばれる二十五人の阿羅漢や菩薩たちが、それぞれ「首楞嚴三昧」の境地に「円通」するに至った機縁や方便について語られており、その言葉を通して、そこに到る方法が明らかにされている。そして『二十五円通』全体を通して、十八界や、地水火風の四大に、空大・見聞覚知・識性の三つを加えた七大のいずれもが円通の門であることが示されている。その『二十五聖』のうち、卷五では、橋陳那以下、二十四番目の大勢至法王子までが登場し、卷六で登場するのが「耳門円通を説いた」觀世音菩薩である。』『義疏注經』は、「もし三科(五陰・十二処・十八界)・七大のそれぞれをもってするならば、

〔六根門のいずれか一つを〕専門にして大事にしたなら、根器にしたがつて各々悟入するだろう。これはみな方便（手立て）である。もしこの世界において、現在でも未来でも、教えが行きわたるならば、上中下の能力にかぎらず、だれも悟りに到達することができ、永遠に衆生が成道する方便となるものとなる。二十五のうち、どの門が勝れているであろうか。〔阿難が〕最初に、あらゆる世界の如来が、菩提を成就することができた、一番始めの方便である、妙なる三摩提を〔教えることを〕求めたから、今（ここで、諸仏が）みな通った〔耳門という〕真理への入口を選ばせて、〔開悟を〕成就させようとしているのだ（若し三科・七大を以てすれば、専門独善、根に随いて各おの入る。此れ皆な方便なり。若し此の界に於いて、現在・未来、設教通方せば、上・中・下の機、咸く悟入することを得、永く衆生成道の方便と為る者なり。二十五に於いて、何れの門を勝と為さんや。先に、請する所の十方の如来に、菩提を成ずることを得し妙三摩提、最初の方便に由るが故に、今、通途の法門を選ばしめ、其れをして成就せしめんとす／若以三科七大、専門独善、随根各入。此皆方便。若於此界、現在未来、設教通方。上中下機、咸得悟入。永為衆生成道方便者。於二十五、何門為勝。由先所請十方如来、得成菩提、妙三摩提、最初方便、故今令選通途法門、使其成就）（卷六・T39.907c）とする。

(15) 文殊師利法王子：説偈對佛 Ⅱ「義疏注経」は、「文殊菩薩は智慧と徳行の主であり、言葉のはたらきは（凡夫には）測（り）知（る）ことができな（い）し、〔真理にのっとつた〕断割判断は疑い〔を入れる余地〕がない。人々の心を自由に操る（ことができる）から、誰もが〔反論できず〕押し黙つてしま（う）。だから仏の旨意旨を受けて、謹んで偈を説いたのだ（文殊は智徳の主にして、言用測ること莫く、断割疑い無し。衆心を与奪すれば、誰か緘黙せざらんや。故に仏旨を承り、敬いて偈を説く／文殊智徳之主、言用莫測、断割無疑。与奪衆心、誰不緘黙。故承仏旨、敬而説偈）（卷六・T39.907c）とする。

（堀 祥岳）